

大都市高齢女性の祖母性

1. はじめに
2. 先行研究と作業課題
3. データと方法
4. 分析結果
5. 結びに代えて

安藤 究*
高橋 勇悦**

要 約

本稿は、大都市高齢女性が持つ祖母性に注目することによって、今後高齢者の新しいライフスタイルについて考察を進める際の一つの基礎的資料を提供することを目的とする。祖母の地位は少なからざる高齢女性が経験する地位であり、人口学的変数の影響で現在大きな変貌をとげつつあることから、上記の目的に適う材料と考える。具体的な作業としては、祖母性の意味類型に関するアメリカでの報告と対照することによって、祖親性の現状の一端を探った。その結果として、まず伝統的なイメージに反する疎遠タイプが二番目に頻度が大きいことが発見された。タイプを規定する変数に関しては、その規定の方向も含めてアメリカとは相違が見られ、特に、シンボリックタイプと個人志向タイプを対称的に分別する上では、単純クロス段階ではアメリカで指摘されている家族外の活動はその影響が見られなかった。かわって影響があったのは、家族的領域の要素と考えられる孫の年齢であった。しかし、祖母の年齢でコントロールすると、孫の年齢が対称的な方向で影響を持っているのは60代だけであり、70代ではその関係は失われた。従って祖母の意味類型は少なくとも祖母の年齢・祖母の他の属性・孫の年齢の相互作用のなかに形成されるものであり、祖母の意味類型は高齢女性のライフスタイルの指標としては単純には用いることが出来ないものの、今後の議論の展開の価値は十分にあるであろう。

1. はじめに

いわゆる高齢化社会の問題は、平均余命の伸長と出生率の低下という人口学的変動に因るところが大きく、特に平均余命の伸長は、「人生の諸段階の間の慣例的な区別が曖昧になり、『成長する』ということ、あるいは『年をとる』ということの意味が、人生のあらゆる時点で、不明瞭になっている」(プラス、1985:4)という事態を引き起こす程、

その影響力は甚大なものとなってきている。そして、人生の構造化が高齢期においては青年期などに較べれば比較的軽度な為に、人口学的変数の影響は高齢期においてより大きく現れることとなり、高齢者の生活・ライフスタイルを捉える上でこれら人口学的変動の影響の検討が是非とも必要とされることとなる。

しかし、一足飛びかつ総体的にこの課題に応えようとするのは、社会的には急務ではあるものの、し

*上智大学大学院博士後期課程

**東京都立大学都市研究センター教授

ばしば混乱も生じせしめるものでもあり、地道な作業の積み重ねもまた一方で必要であるのは言うまでもない。すなわち、高齢者の生活に対する人口学的変数の影響を性急に包括的に論じるのではなく、高齢者の生活を構成する社会的領域において如何なる状況が出現しているのか、またそれらの領域間には如何なる関連が存しているのかを探る作業も切に求められるであろう、ということである。

ここで上記の内容をより明確にするためにライフコース論を援用してみよう。近年急速に台頭してきたライフコース論は、その歴史の新しさと学際的な性格により必ずしも研究者の焦点が定まっているわけではないが、しかし基本的な共通の関心事がないわけでもない。筆者のうち一名は別の機会に三つの基本的と思われる視点を採用したので(安藤、1990)、ここでもそれを掲げることとする。すなわち、「1.個人のライフコースは複数のキャリアが相互依存した集合体である(Elder、1977:282-283)」「2.個人のライフコースは他者のライフコースとの係わりあいのなかで展開される(正岡、1982:12)」「3.個人および相互に係わりあうライフコースの展開は個人的時間・社会的時間・歴史的時間という時間の重層構造のなかで展開される(Elder、1975)」、ということである。

このうち、第一番目の視点で先の課題を表現するならば次のように言うことができるであろう(2番目、3番目に関しては後に用いる)。すなわち、人口学的変数が高齢者のライフコースを構成する各キャリアおよび各キャリア間の相互作用に対してどのような影響を与えているのか、そしてその結果各キャリアの集合たる高齢者のライフコースには如何なる様相が表出しているのか、ということである。

この課題を遂行する過程は複雑かつ長大なものとなろうが、さしあたっての作業の出発点は、高齢者のライフコースを構成するキャリアの一つを取り上げその現状を分析し、基礎的資料を提供して今後高齢女性(者)のライフスタイルを考えて行く上での道具なり指標なりの可能性を探ることであろう。こうした作業の中で他のキャリアとの関

連が窺われ、さらには人口学的変数の影響を読み取ることも可能となるであろう。

そこで本稿では高齢者のライフコースのキャリアとして家族キャリア、特に祖父母キャリアに着目し、現代の大都市高齢者の祖父母という社会的領域の現状の一端を検討することとしたい。その理由は、第一には、祖父母という地位が少なからざる人々がライフコースの中盤から後半にかけて経験することが多い地位であることによる。例えば、アメリカでは六五歳以上の7割が祖父母となっているという指摘がある(Kivnich、1982:59)。また、成人の社会化の例として祖親性研究が有効であるという指摘も(Neugarten & Weinstein、1964:204)、祖父母という地位が大きな割合で経験される地位であることを示すものであろう。

第二の、そしてさらなる積極的理由としては、現代の祖父母はパイオニア的存在(Shanas、1980:13-14)であるということが挙げられる。例えば、アメリカでは、1900年の死亡率の環境下では子どもの出生時に祖父母が四人とも生存している確率は四分の一であるが、1976年の死亡率のもとではその確率は三分の二近くとなったということ(Uhlenberg、1980)、また、平均余命の伸長によって多くの成人が孫のほとんどを知ることが出来るようになり、孫も祖父母のほとんどを知ることが出来るようになったということが報告されている(Uhlenberg、1979)。日本では、概算ではあるが、次のような指摘がある。女性の場合、平均初婚年齢と第一子出生までの間隔はあまり変化していないので、戦前・戦後を通じて初めて祖母になるのはほぼ五十歳前後であり、従って戦前・戦争終了後では出生時の平均余命がほぼ五十前後であったことを考えると、祖父母-孫関係は比較的まれな関係であったというものである(藤本、1981:171-172)。従ってその後の平均余命の伸長によって現代日本の祖父母もやはりパイオニア的経験をしていると言えよう。

こうした変化が実質的には第二次世界大戦後の変化(Cherline & Furstenberg、1986:26)であることを鑑みれば、現代の祖父母はまさに「新しい」祖親性の局面にさしかかっていると見えるわ

けであるが、ここで留意する必要があるのは現代の祖父母をパイオニアたらしめているものは人口学的変化であるということである。

つまり、祖父母という地位はその地位を経験する高齢者が多くかつ比較的その地位を楽しむ者が多いとも言われており (Kivnich, 1981: 365)、しかも人口学的変化によって祖親性の変化がもたらされているのであり (Hagestad, 1985: 34)、従って先に述べた課題 (基礎的資料を提供し、今後高齢女性 (者) のライフスタイルを考えて行く上での道具なり指標なりの可能性を探る) の着手として、祖親性の一端の現状分析を行いその中で他のキャリアとの連関を窺うことは、それが求めるところに極めて適合的であると思われるということである。

2. 先行研究と作業課題

2-1. 祖父母の類型に関する先行研究

前章では祖親性を考慮することの意味を検討したが、しかし祖親性に関する研究自体は現在のところ非常に少なく、まだ緒についたばかりという段階にある (Bengtson, 1985: 11; Cherlin & Furstenberg, 1986: 3-5; Cunningham-Burley, 1984: 325; Neugarten & Weinstein, 1964: 199-200; Robertson, 1977: 165)。しかし、先行研究はすくないというものの、そこから浮かび上がってくるのは祖父母の多様性ということであり (Bengtson, 1985)、したがって、祖親性の研究を進めるためには、たとえそれが大まかなものであろうとも、祖父母の類型を検討していくというのは、出発点としては一つの方向であるだろう。

そこで本節ではこれまでに祖父母の類型を扱っている三つの研究、すなわちニューガーデン&ワインシュタイン、ロバートソン、チャーリン&ファーステンバーグによる類型を簡単に紹介し、次節において指針とするものを述べることにする。

ニューガーデン&ワインシュタインの調査はシカゴのミドルクラスの、五十代から六十代の七十組

の祖父母夫婦を対象としてなされたものである (Neugarten & Weinstein, 1964)。その結果、帰納的に得られたタイプのそれぞれの概要は以下の通りである。なお、各タイプの訳語に関しては (藤本, 1981) を参考にした (次のロバートソンの類型も同様)。

①フォーマルな型 (formal)

祖父母としてふさわしいと考える行動をする。したがって両親との間に境界を定め、孫を可愛がりはするが、親役割を侵すことはない。

②享楽追求型 (fun-seeking)

孫との間にインフォーマルで友人のような関係を結ぶタイプ。祖父母と孫の間の満足は互惠的なものであることが留意されている。

③両親代理型 (parent surrogate)

祖母にのみ見られるタイプで、母親が働きに出るなどの際に両親の要請によって具現化される。

④家族の知恵の蓄積型 (reservoir of family wisdom)

祖父母が特別な技術や財産の分配者であるタイプで、権威的な父系中心の関係となる。

⑤疎遠型 (remote; little effect on the self)

クリスマスや誕生日といった特定の儀式のときに表面に出てくるタイプ。孫との接触は稀で、接触する際にもそれはごく短い時間となる。姿勢としては好意的だが、本質的に子どもの生活から分離している。

ロバートソンによる調査はウィスコン州の七十一世帯から抽出した百二十五人の祖母に対しておこなわれた (Robertson, 1977)。ロバートソンは象徴的相互作用論者に依って行為に先行する祖母の持つ意味に留意し、社会的規範力と個人的欲求の二つのレベルの強弱の組合せで四つの類型を設定した。各タイプの概要は以下の通りである。

①均衡タイプ (apportioned)

このタイプに属する祖母は孫にとって道徳的に正しいと思われることをする程度と、自分がしたいように孫と接する程度がほぼつりあっている。

②シンボリックタイプ (symbolic)

このタイプの祖母は、道徳的に良いとされていることに関心が強く、孫との遊びなどで得られる個

人的な満足にはほとんど重きを置かない。

③個人志向タイプ (individualized)

このタイプに属する祖母は、孫のことを、淋しさを紛らわせてくれたり、家の血筋を伝えたりする個人的な満足の源と見ている。規範的な期待を表明することは稀である。

④疎遠なタイプ (remote)

祖母であることの社会的な側面にも個人的な側面にもほとんど注意を払わないタイプで、祖母であるということに距離を保ち、儀式的に反応する。

チャーリン&ファーステンバーグはパイロットスタデイの面接調査から三つのタイプを抽出し、全国規模の調査においてもその類型が可能かどうかの検討を試みた (Cherlin & Furstenberg, 1986)。各タイプの概要は以下の通りである。

①疎遠な関係 (remote relationship)

儀式的な、ただ単にシンボリックな関係しか維持できないタイプで、気楽で友好的な関係を築くには、祖父母と孫の接触の頻度があまりにも小さい。

②仲間関係 (companionate relationship)

チャーリン&ファーステンバーグの調査ではもっとも多かったタイプで、孫との間に気楽で友好的なスタイルの相互作用が存している。このタイプに属する祖父母は、孫と何をおこなうかと尋ねられた際には、情緒的に満足する余暇活動を繰り返し口にする。

③密接な関係 (involved relationship)

このタイプの祖父母は、孫の子育てに対してアクティブな役割を持ち、しばしば、祖父母というよりも両親として行動する。孫とは毎日のように接触する傾向があり、孫に対して権威を行使することもある。

2-2. ロバートソンの研究の概要と作業課題

前節では祖父母の類型に関する先行研究を紹介したが、本稿ではそのうちロバートソンの類型を用いることとする。その理由はニューガーテン&ワインシュタインおよびチャーリン&ファーステンバーグにおいては祖父母の類型が帰納的に抽出されているのに対し、ロバートソンは類型の軸をあらかじめ理論的に設定しているという点にある。

ここで、後に本稿で用いる調査結果と比較するためにも、今少しロバートソンの報告の概要に触れておくこととする。まず、タイプの設定に関してであるが、社会的、個人的という二つの次元をはかる質問をそれぞれ十づつ用意し、因子分析の結果それぞれ六つの質問を採用して、各次元の合計点の平均をもって各次元の力の高低を定め、その組合せでタイプを設定した (<表1>参照)。ロバートソンは各タイプの分別に統計的に有意に影響を与えているものと有意ではないものを併せて各タイプの特徴の記述を行っているの、それを<表2>にまとめておく。なお、統計的に有意な影響を及ぼしていたのは教育程度・生活満足・(祖父母としての) 行動の頻度・年齢であった。

<表1>ロバートソンによる祖母の意味類型

		個人的次元	
		高い	低い
社会的次元	高い	均衡タイプ (N=36)	シンボリックタイプ (N=33)
	低い	個人志向タイプ (N=21)	疎遠タイプ (N=35)

(Robertson, 1977, 168)

<表2A>ロバートソンによる祖母の類型のプロフィール

	教育程度 (高い順)	友人交際 頻度 (高い順)	コミュニ ティ活動 (高い順)	生活満足度 (高い順)
均衡タイプ	2	2	1	3
シンボリックタイプ	1	1	3	1
個人志向タイプ	4	4	4	2
疎遠タイプ	3	3	2	4

<表2B>ロバートソンによる祖母の類型のプロフィール

	祖母の年齢 (高い順)	配偶者 (傾向大)	就業状況 (傾向大)
均衡タイプ	3	未亡人	非就業
シンボリックタイプ	4	配偶者あり	就業
個人志向タイプ	1	未亡人	非就業
疎遠タイプ	2	未亡人	非就業

上記の作業の結果得られる知見として、ロバートソンは、祖母の意味の類型はライフスタイルによって規定されるという指摘をおこなっている。特に年齢には留意し、「より若い祖父母はシンボリックタイプになりやすい。……（中略）……一般的に彼女達は家族外の活動に大きく関わっている。これは彼女達がかつとも教育程度が高いこと、多くが結婚しており就業もしているという事実と関係していると思われる。また、友人やコミュニティとのタイも非常に多く、生活満足度も高い。……（中略）……反対に、より年老いた祖母は個人志向タイプになりやすい。これらの女性がかつとも教育程度が低い～疑いもなく年齢の機能である。予想されるように、多くが未亡人であり就業していない。友人やコミュニティとのタイの数や接触頻度も最も小さい」（Robertson, op. cit., :173）というように、年齢が他の要素と相互作用して、シンボリックタイプと個人志向タイプという対照的な祖父母のスタイルを生み出すという見解を打ち出している。

ここではシンボリックタイプと個人志向タイプは家族外の活動量の大小によって分別されるということ、それら家族外の活動に関する変数の背後には年齢が関わっていることが指摘されているが、まず前者の点は前章で述べた本稿の目的から見ると興味深い。何故なら、家族外の活動の様態が祖母の意味類型の分別に係わるならば、高齢女性のライフスタイルを捉える一つの指標として祖母の意味の類型を用いることが可能性として浮かび上がってくるからである。

後者の点に関しては、ニューガーデン&ワインシュタインも祖父母の年齢が類型の分別に影響を持つと指摘しているが（Neugarten & Weinstein, 1964）、しかしこのニューガーデン&ワインシュタインの知見に対しては、チャーリン&ファーステンバーグが実はそれは孫の年齢による影響なのではないかという指摘をおこなっている（Cherlin & Furstenberg, 1986）。ロバートソンにおいては基本的に祖父母の年齢のみが検討されているが、このチャーリン&ファーステンバーグの指摘や、孫の発達段階が祖父母に与える影響をしめしたカー

ナ&カーナ（Kahana & Kahana, 1977）の報告を鑑みるならば、孫の年齢も検討に含める必要があると思われる。

そこで、以上の議論から、本稿では、祖母性の意味類型を規定する属性の特徴をアメリカにおけるロバートソンの報告と比較・対照し、大都市高齢者の祖母性的一端を探ることによって高齢者のライフスタイルに関する基礎的資料の提供を目的とする。同時に、その作業を通じて、高齢者の「新しい」ライフスタイルの一つの指標として祖親性を用いることの可能性も検討することとする。また、併せてライフコース視点の導入の有効性にも簡単に触れてみたい。具体的には以下のことを作業課題とする。

- 1) ロバートソンの枠組みに従って祖母を四つのタイプに分類し、まず各タイプの特徴を概観し、ロバートソンの報告と比較する。
- 2) 特にシンボリックタイプと個人志向タイプの分別に関して焦点を当てることによって、高齢女性のライフスタイルの指標として祖母の意味類型を用いることの可能性を検討する。
- 3) 祖母の年齢に関するロバートソンの見解を受けて年齢で各属性をコントロールし、その結果を2)の結果と併せて検討する。

3. データと方法

3-1. データ

使用したデータは、東京都立大学都市研究センターによる、選挙人名簿をもとに無作為抽出法で選んだ7,000人（東京23区在住・60歳以上75歳以下）を対象とする調査によって得られたものである。調査は'91年5月に郵送法によって実施され、回収率は65.8%、4,607票の有効回答数であった⁽¹⁾。全体の男女数は男性2,178名・女性2,429名、年齢は60-64歳が1,726名・65-69が1,579名・70-75が1,302名であった。孫がいたのは祖父・祖母全体で2,918名で、今回はそのうちの祖母である1598名を対象とした⁽²⁾。

3-2. 方法

まず類型の生成についてであるが、社会的次元・個人的次元に関して、それぞれ二つずつの質問文を用意した。質問文はロバートソンの用いたものを日本において適合的と思われるように修正して用いた³⁾。社会的次元として用いたのは、「孫のよいお手本となるよう、いつも心がけていたいと思っている」「孫がいるおかげで、社会に対する責任を果たしたように思える」であり、個人的次元としては「孫がいるおかげで若々しい気持ちになれ、うれしく思っている」「孫がいるおかげで、生きていて良かったように思える」である。各質問とも回答は「そう思う(=4)」から「思わない(=1)」までの4件法で問い、次元ごとに加算尺度として用いた。そして各次元とも2点から5点以下をLow、5点を越えて8点をまでをHighとし、これらの組合せでタイプを設定した。

ロバートソンはこのタイプの生成にあたっては、各次元の合計点の平均点をもってその次元の高低を定めたが⁴⁾、この方法では全体の平均点が高い場合にはインフォーマントの得点自体が高くとも疎遠タイプに分類されてしまうことが考えられる。それでは疎遠タイプのラベルとの間にあまりにも開きが生ずることとなるので、本稿では前述のような区分を用いた。

独立変数として用いるものは、ロバートソンに倣って「教育程度」「友人交際頻度」「コミュニティ活動」「生活満足度」「就業状況」「婚姻上の地位」「健康」「祖母の年齢」である。「教育程度」は「低学歴」「中学歴」「高学歴」の3区分を用いる。「低学歴」には旧制小学校・旧制高等学校・新制中学校卒業者が、「中学歴」には旧制中学・師範学校・実業学校・高等女学校・新制高等学校・新制の短大および高専卒業者が、「高学歴」には旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校・旧制大学・新制大学および大学院を卒業・修了した者が分類される。

「友人交際頻度」は、ロバートソンの用いた区分を参考として、月に1~2回程度以上を交際頻度の「高い」者とし、それより少ないものを「低い」者とした。

「コミュニティ活動」としては町内会活動を取り上げ「役員経験あり」「役員経験なし」「加入していない」の3区分を用い、「役員経験あり」を最も関与の高いものというように解釈することとする。町内会は相対的な自発性ということに関しては低いと考えられるが(園部、19891:51)、本稿では前章での作業課題で述べた通り、家族的領域外での活動の大きさが祖母の意味類型とどのように関わってくるかということに一つの関心が存するので、自発性が相対的に低い可能性が考えられるものの、「役員経験あり」を上記のように解釈し、採用した。

「生活満足度」はこれは規定要因なのか結果なのか特に意見の分かれる所であると思われるが、一応比較の為独立変数として用いることとする。区分けは、満足している(「はい」と、満足はしていない(「わからない」「いいえ」とした。

「就業状況」は現在被雇用者の地位にあるが否かの区分を用い、婚姻上の地位は現在配偶者がいるか否かという区分を用いた。「健康」に関しては、「非常に健康」「まあ健康」(調査表では「健康だが無理はきかない」)「非健康」(調査表では「病気がち」)「寝ていることが多い」という区分を設定した。祖母の年齢は、文化的な要素を考慮して、「60代」「70代」というカテゴリーで検討することとした。

また、前章で述べた理由にしたがって、ロバートソンの用意した変数とは別個に、「孫の年齢」も投入することとする。孫の年齢の区分は、孫の社会的世界の拡がりを考慮して、小学生以下を「小さい」とし、中学生以上を「大きい」とした。

以上の独立変数とタイプの単純クロス集計の後、課題で述べた理由によって、単純クロス集計の後には祖母の年齢を第3変数として導入することによって祖母の年齢の効果を検討することとする。

4. 分析結果

4-1. タイプの単純集計

まず社会的次元・個人的次元の測定に用いたそれ

ぞれ二つの質問の関連を検討すると、社会的次元は $\alpha = 0.7148$ 、個人的次元は $\alpha = 0.7632$ であり、内的整合性は保証範囲内にあると思われる。社会的次元の加算点数のレンジは2-8、平均は6.1、標準偏差は1.6であり、個人的次元の加算点数のレンジは2-8、平均は6.6、標準偏差は1.6であった。

各タイプの単純集計は<表3>に掲げる。「孫に没頭する祖父母」という通念から予想されるように、社会的次元でも個人的次元でも高得点である均衡タイプの頻度が高いが、疎遠タイプの頻度が二番目に大きいことは注目に値すると思われる。ロバートソンとは異なり各次元の実際の合計点の平均点で各次元の高低を分けているのではないので、特に留意が必要と思われる。

<表3> 祖母の意味類型の単純集計

	頻度	PERCENT	VALID ERCENT	CUM PERCENT
均衡タイプ	987	61.8	61.8	61.8
シンボリックタイプ	74	4.6	4.6	66.4
個人志向タイプ	260	16.3	16.3	82.7
疎遠タイプ	277	17.3	17.3	100.0
TOTAL	1598	100.0	100.0	

直井は子どもとの同居や交流が高齢者の幸福感をもたらすという通念に対し、「必ずしも子どもとの同居や交流が自己の幸福にとって不可欠ではないようなタイプの高齢者が層として出現しはじめているのではないだろうか」という問いを発し、男性にとっては健康・友人が、女性にとっては健康・世帯収入・親族交際が高齢者の幸福感に影響を与えるという知見を得ている(直井, 1990)。ここでは女性に幸福感を規定するものとして依然として親族交際が大きいことが報告されているが、子どもの有無・子どもとの同居は影響を持っていないことも指摘されており、従来の通念にゆらぎが生じていることが示唆されている。この示唆を念頭に置くと、疎遠タイプの頻度の大きさは新たな祖母のスタイルの出現をほのめかすものである可能性もなくもないであろう。もちろん、「新たな

スタイルの出現」と解釈するには二時点比較が必要であるが、従来の通念に対する検討を要求するものであることは確かであると思われる。今後の課題としたい。

4-2. 各タイプに対する規定要因

各タイプと投入した独立変数との単純クロスの結果は<表4>に示される通りである。カイ自乗検定において統計的有意(5%水準)を示したものの、もしくは統計的傾向(10%水準)を示したものは「教育程度」「友人交際頻度」「コミュニティ活動」「生活満足度」「祖母の年齢」であった。以下、各タイプに対するこれらの変数の規定関係を簡単に見ることとする。

まず均衡タイプについてであるが、教育程度に関しては、その程度が低い者が成り易く、高い者は比較的成り難い。友人交際頻度は頻度が高い者が成り易い傾向を示し、コミュニティ活動(町内会)は関与の度合いが高い者が成り易い。生活満足度は満足している者が成り易く、満足はしていない者(どちらともつかない者や不満足者)は成り難い。祖母の年齢では60代の祖母は成り難く、70代の祖母は成り易い。

シンボリックタイプは、教育程度に関してはそれ程ははっきりとした傾向は見られない。やや高い者が成り難い程度である。友人交際頻度は低い者が成り易く、高い者は成り難い。コミュニティ活動(町内会)もあまりはっきりとした傾向は見られない。生活満足度は満足している者が成り難い傾向を示し、満足はしていない者が成り易い傾向を示している。祖母の年齢は60代の者がやや成り易い傾向を示すにすぎない。

個人志向タイプに関しては、教育程度はその程度が高い者が成り易く、友人交際頻度は高い者と低い者でほとんど傾向の違いは見られない。コミュニティ活動では関与の度合いが高い者が成り難い。生活満足度に関してはあまり傾向の違いは見られない。祖母の年齢に関しては60代の者が成り易く、70代の者が成り難い。

疎遠タイプでは、教育程度の低いものが成り難く、中程度の者がやや成り易い。友人交際頻度に

<表4A>祖母の意味類型と各変数の単純クロス

実数 列% 調整標準残差	学 歴			友人交際頻度		町 内 会		
	低 い	中	高 い	高 い	低 い	役員経験 あり	役員経験 なし	加入して いない
TYPE								
均衡タイプ	434 64.7% 2.1	453 60.3% -1.0	81 54.7% -1.8	677 63.2% 1.8	207 57.8% -1.8	284 68.3% 3.1	387 60.0% -1.4	263 59.1% -1.5
シンボリックタイプ	32 4.8% .3	36 4.8% .4	4 2.7% -1.2	44 4.1% -2.4	26 7.3% 2.4	20 4.8% .4	23 3.6% -1.4	24 5.4% 1.2
個人志向タイプ	102 15.2% -1.0	120 16.0% -.3	33 22.3% 2.1	170 15.9% -.9	64 17.9% .9	53 12.7% -2.4	115 17.8% 1.2	81 18.2% 1.1
疎遠タイプ	103 15.4% -2.0	142 18.9% 1.4	30 20.3% .9	180 16.8% -.1	61 17.0% .1	59 14.2% -1.8	120 18.6% 1.4	77 17.3% .2
COLUMN TOTAL	671 42.7%	751 47.8%	148 9.4%	1071 74.9%	358 25.1%	416 27.6%	645 42.8%	445 29.5%
sig 危険率 (カイ自乗値検定)		0.0975 P < 0.1		0.068 P < 0.1			0.0324 P < 0.05	
missing cases		28		189			92	

<表4B>祖母の意味類型と各変数の単純クロス

実数 列% 調整標準残差	生活満足度		雇用上の地位		配 偶 者	
	は い	わから ない いいえ	働いて いる	働いて いない	い る	現在は いない
TYPE						
均衡タイプ	844 64.3% 4.4	131 49.8% -4.4	334 59.7% -1.2	631 62.7% 1.2	617 62.1% .2	365 61.7% -.2
シンボリックタイプ	55 4.2% -1.6	17 6.5% 1.6	27 4.8% .2	46 4.6% -.2	49 4.9% .6	25 4.2% -.6
個人志向タイプ	209 15.9% -.8	47 17.9% .8	98 17.5% 1.0	157 15.6% -1.0	160 16.1% -.1	96 16.2% .1
疎遠タイプ	205 15.6% -4.0	68 25.9% 4.0	100 17.9% 4	172 17.1% -4	168 16.9% -.5	106 17.9% .5
COLUMN TOTAL	1313 83.3%	68 4.3%	559 35.7%	1006 64.3%	994 62.7%	592 37.3%
sig 危険率 (カイ自乗値検定)		0.0003 P < 0.01		0.679 N.S		0.8902 N.S
missing cases		22		33		12

＜表 4C＞祖母の意味類型と各変数の単純クロス

実数 列% 調整標準残差	健 康			祖母年齢	
	非常に 健康	まあ健康	非健康	60代	70代
TYPE					
均衡タイプ	216 62.8% .5	614 61.2% -.5	100 61.7% .0	628 59.5% -2.6	359 66.1% 2.6
シンボリックタイプ	13 3.8% -1.0	53 5.3% 1.3	6 3.7% -.7	54 5.1% 1.3	20 3.7% -1.3
個人志向タイプ	63 18.3% 1.1	156 15.6% -1.3	29 17.9% .5	189 17.9% 2.5	71 13.1% -2.5
疎遠タイプ	52 15.1% -1.1	180 17.9% 1.1	27 16.7% -.2	184 17.4% .2	93 17.1% -.2
COLUMN TOTAL	344 22.8%	1003 66.5%	162 10.7%	1055 66.0%	543 34.0%
sig 危険率 (カイ自乗値検定)		0.6228 N.S		0.0256 P < 0.05	
missing cases		89		0	

関しては、高い者と低い者で傾向の違いは見られない。コミュニティ活動は、関与の度合いが高い者は比較的成り難く、生活満足度は満足している者は成り難く、満足はしていない者が成り易い。祖母の年齢に関しては、60代と70代ではほとんど差がない。

さて、次に以上の結果としてロバートソンの報告とを対照し、各タイプに対する独立変数の規定関係の相違を、暫定的ではあるが簡単に見ておこう⁽⁵⁾。

均衡タイプでは、教育程度は逆の規定関係となっている観が強い。ロバートソンはこのタイプの教育程度は比較的高いという記述をおこなっているが、本データでは教育程度が高い者はこのタイプに成り難いという結果が得られている。友人交際・コミュニティ活動に関してはロバートソンではともに高く、本データでも高い者が成り易いという結果となっており、同方向の規定関係と思われる。生活満足度はロバートソンでは平均をやや下回るのに対し本データでは満足しているものが成り易く、逆の規定関係が示唆されている。祖母の年齢

はロバートソンでは2番目に高く、本データでも60代の祖母は成り難く、70代の祖母は成り易いという様に、同方向と思われる。

シンボリックタイプでは、教育程度はやや逆方向と言うに留める。ロバートソンでは教育程度が最も高くなっているが、本データではその程度の高低が明確な差異をもたらしてはいないからである。友人交際頻度ではロバートソンでは最も高く本データでは低い者が成り易い様子が見られ、逆方向の規定関係が窺われる。コミュニティ活動は、やや同方向の関係が示唆される。ロバートソンでは2番目に低く、本データにおいては関与の度合いの小さい者がやや成り易い。生活満足度では逆の傾向が見られる。すなわち、ロバートソンでは最も高いが、本データでは満足している者が成り難い傾向を示し満足はしていない者が成り易いという傾向を示すということである。祖母の年齢に関しては、ロバートソンでは最も若く、本データは60代の者がやや成り易いので、多少同傾向が示唆される。

個人志向タイプに対しては、教育程度は逆の規定

関係が存するように思われる。ロバートソンの報告では教育程度は最も低い、本データでは高い者が成り易いという結果が見受けられるからである。友人交際に関しては、本データにおいて高低のもたらす差異がほとんど見受けられないので規定関係の同異を論じることが困難であり、逆方向とは言えない、とするに留める。コミュニティ活動は、ロバートソンでは最も低く、本データでも関与の度合が高い者が成り難いことから、同方向の傾向が示唆されている。生活満足度においては、ロバートソンにおいては2番目に高く、本データでは傾向の相違は見られないので、同異を論じ難い。祖母の年齢では、ロバートソンの報告では最も高いが、本データでは60代の者が成り易く70代の者が成り難いため、逆方向の規定関係が考えられる。

疎遠タイプでは、教育程度に関しては、ロバートソンでは平均よりも低く本データではその程度が低い者が成り難いので、逆方向の規定関係があるように思われる。友人交際頻度は本データではその高低の間に傾向の相違が見られないために、やはり同異は簡単には論じられない。コミュニティ活動では、ロバートソンにおいて2番目に低く本データでは関与の度合が高い者は比較的成り難いため、同方向の規定関係が見受けられよう。生活満足度はロバートソンにおいて最も低く、本データで満足している者は成り難く不満足なものが成り易いことから同方向の規定関係が考えられる。祖母の年齢に関しては、本データにおいて60代と70代の間にこのタイプに対しての差異がほとんどないので、判断を留保しておく。

4-3. シンボリックタイプと個人志向タイプ

ロバートソンの報告と本データの比較の結果、幾つか興味深い点が浮かび上がってきている。例えば、その一つには、3つのタイプで教育程度の規定関係がロバートソンにおける報告と逆の方向になっているという点が挙げられるだろう。また、それ程明確ではないにしろ、シンボリックタイプでも逆方向となっているのが多少示唆されている。したがってここから、教育程度の高低が直接タイプ

の分別に影響を与えるとするならばそれはどのような意味においてであるのか、また、他の変数を通じて影響を与えているならばそれは何なのか、などに関してそれぞれ検討し、その結果から教育程度の高低が持つ意味の日米比較をする作業が一つの課題として浮上するだろう。

しかし、周知の通り、教育程度は様々な社会的領域と関連がありその検討は慎重を要すること、ロバートソンの報告において教育程度が何と係わりを持つのかなどが明示されていないこと、そして何より「2-2」で挙げた作業課題を行うことが本稿にとってはより急務であるため、タイプを規定する教育程度の逆の規定関係についてはその存在を指摘するに留めたい。つまり、「4-2」において得たものは、各タイプに対する変数の規定関係に関する基本的な情報と、その結果が必ずしもロバートソンの報告にパラレルではないことからロバートソンの示した構図をそのまま受け入れることには留保が必要となる可能性があるということである。この点を認識した上で、以下はシンボリックタイプと個人志向タイプの検討に移りたい。すなわち、先に述べたように、この作業を通じて高齢女性のライフスタイルの一つの指標として祖母の意味類型を用いることの可能性を検討することである。

さて、祖母であることに関して対照的な内容を持つシンボリックタイプと個人志向タイプは、ロバートソンによれば関係する変数の規定関係も逆となっていた。例えば、教育程度はシンボリックタイプでは高いが個人志向タイプでは低い、友人交際頻度はシンボリックタイプでは高く個人志向タイプでは低い、という具合である。そして、これらの相違の持つ意味の中で最も重要なのは家族外の活動の様相が違うということであり、そしてこの点において、祖母の意味類型がライフスタイルの一つの指標となる可能性が存したのであった。

以上の点を念頭において本データを見ていくと、本データでは必ずしもロバートソンの報告するようには、使用した独立変数の規定関係が対照的となっていないことが窺われる。教育程度に関しては、逆方向の規定関係が示唆されるものの、シン

ボリックタイプに対してその程度の高低は明白な差異を生み出していない。友人交際頻度に関して、シンボリックタイプには頻度が低い者が成り易く、個人志向タイプに対しては頻度の高低がほとんど差異をもたらしていないというように、少なくとも対照的とは言えない関係である。コミュニティ活動は、関与の度合が中程度のものがシンボリックタイプには成り難く、個人志向タイプには関与の度合が高い者が成り難いという様に、これもまた対称的とは言えない関係である。生活満足度に関しては、シンボリックタイプには満足している者が成り難い傾向で、個人志向タイプに対しては満足度の高低はほとんど差異をもたらさない。祖母の年齢も、シンボリックタイプでは60代の者がやや成り易く、個人志向タイプでも60代の者のほうが成り易く70代の方が成り難いというように、対称的とはいえない。特に、家族外の活動ということに関してより直接的な係わりを持つと考えられる友人交際頻度やコミュニティ活動に、ロバートソンの報告のような対照的な関係が見られないことには注意を払う必要があるであろう。何故なら、少なくともシンボリックタイプと個人志向タイプに関しては、これらを以て高齢女性のライフスタイルに関する単純な解釈（例えば、ある高齢女性がシンボリックタイプならば家族外の活動が多く、個人志向タイプであるならばその逆である、という様な解釈）を行なうことが困難となるからである。

従って、ここで問題となるのは、では一体何がシンボリックタイプと個人志向タイプの対照的な分別に影響を持っているかということである。上で見たように、これまでに用いた変数の中では、教育程度に対称的な規定関係が示唆されるのみであった。先に述べたように、教育程度に関しては、ロバートソンはそれが何と係わりあいを持つかを明示していない。ただ、教育程度が家族外の活動に何等かの変数を通じて作用しているとするならば、「2-2」で引用した箇所においてはそれは就業状況であろう。教育程度の高い者は被雇用者の地位に就きやすく、それ故家族外の活動が大きくなりシンボリックタイプになると思われるということ

である。しかし、本データでは就業状況自体はタイプの分別に有意ではなく、ロバートソンの報告に示唆される構図が想定され難い。もちろん、教育程度の持つ意味は慎重に検討される必要があるが、家族外の活動により直接的に係わると思われる変数に関する結果を考慮するならば、別の構図を検討する必要性に迫られていると言えよう。そこで、「3-2」で述べた理由に従って孫の年齢を検討の範囲に入れてみることにする。その結果は<表5>に示す。

<表5>タイプと孫の年齢

実数 列% 調整標準残差	孫の年齢	
	小さい	大きい
TYPE		
均衡タイプ	372 60.1% -1.1	615 62.8% 1.1
シンボリックタイプ	19 3.1% -2.4	55 5.6% 2.4
個人志向タイプ	119 19.2% 2.5	141 14.4% -2.5
疎遠タイプ	109 17.6% .2	168 17.2% -2
COLUMN TOTAL	619 38.7%	979 61.3%
sig 危険率 (カイ自乗値検定)	0.0105 P < 0.05	
missing cases	0	

まず、シンボリックタイプに対しては、孫が大きいとこのタイプに成り易く孫が小さいと成り難いという傾向が読み取れる。次に個人志向タイプに対してであるが、孫が大きいと成り難く小さいと成り易いという傾向が読み取れる。すなわち、孫の年齢の高低は、シンボリックタイプと個人志向タイプに対して逆方向に働き掛けるということである。

シンボリックタイプの祖母は孫が遊びなどを通じ

て得られる個人的な満足源とはなっていないが、これを念頭に置くと、この結果が持つ意味として、一つには孫の年齢が高くなるにつれて孫の社会的ネットワークが拡がり、その結果孫のネットワークの占める祖母-孫の関係の量的な重みが相対的に低下するということが考えられるだろう。孫の年齢が低いときには祖母とも良く遊びなどをするが、大きくなるにつれて友人の数などが多くなり、孫が時間を一緒に過ごす相手として祖母が選択される機会が減少するといったケースである。チャーリン&ファーステンバーグは、ヒアリングの際に、孫がすでに成長しているにもかかわらず飾ってある写真は幼少時の頃の写真であることがしばしば見られたことに注意を促しているが(Cherlin & Furstenberg, 1986)、こうした現象も上記の孫の社会的ネットワークの状態の変化を示唆するものであろう。

それ故、シンボリックタイプと個人志向タイプの対照的な分別に重大な影響を持つものとしては、本データの単純クロスの結果からは、ロバートソンの言う家族外の活動を支持することが困難であり、孫の年齢という家族的領域の要素が代わりに候補として挙げられることとなる。そして、その結果、高齢女性のライフスタイルを捉える指標として祖母の意味類型を用いることは、少なくともシンボリックタイプと個人志向タイプに関しては留保を付ける必要があることとなるであろう。

4-4. 祖母の年齢によるコントロール

本節ではロバートソンの2番目の知見(家族外の活動に関する変数の背後には祖母の年齢がある)を検討するため、「2-2」に述べたように使用した独立変数を祖母の年齢でコントロールすることとする。〈表6〉がその結果である。

〈表6A〉祖母の意味類型と各変数とのWクロス(祖母の年齢をコントロール)

実数 列% 調整標準残差 TYPE	60代 教育程度			70代 教育程度			60代 友人交際頻度		70代 友人交際頻度	
	低	中	高	低	中	高	高い	低い	高い	低い
均衡タイプ	250 62.3% 1.4	314 59.7% .1	54 49.1% -2.4	184 68.1% 1.2	139 61.8% -1.6	27 71.1% .7	431 60.9% 1.3	139 56.3% -1.3	246 67.8% 1.3	68 61.3% -1.3
シンボリック タイプ	23 5.7% .8	26 4.9% -.1	3 2.7% -1.2	9 3.3% -.5	10 4.4% .7	1 2.6% -.4	33 4.7% -1.8	19 7.7% 1.8	11 3.0% -1.6	7 6.3% 1.6
個人志向タ イプ	67 16.7% -.8	89 16.9% -.8	29 26.4% 2.5	35 13.0% -.1	31 13.8% .4	4 10.5% -.5	125 17.7% -.5	47 19.0% .5	45 12.4% -.8	17 15.3% .8
疎遠タイプ	61 15.2% -1.6	97 18.4% .8	24 21.8% 1.2	42 15.6% -.1.2	45 20.0% 1.3	6 15.8% -.3	119 16.8% -.1	42 17.0% .1	61 16.8% -.1	19 17.1% .1
COLUMN TOTAL	401 38.7%	526 50.7%	110 10.6%	270 50.7%	225 42.2%	38 7.1%	708 74.1%	247 25.9%	363 76.6%	111 23.4%
sig 危険率 (カイ自乗値 検定)		0.0675 P < 0.1		0.7824 N.S.			0.2685 N.S.		0.3202 N.S.	
missing cases		28		28			169		169	

※〈表6〉中の括弧については註(6)参照

<表6B>祖母の意味類型と各変数とのWクロス(祖母の年齢をコントロール)

実数 列% 調整標準 残差	60代 町内会			70代 町内会			60代 生活満足度		70代 生活満足度	
	役員経験 あり	役員経験 なし	加入して いない	役員経験 あり	役員経験 なし	加入して いない	はい	いいえ・ わからない	はい	いいえ・ わからない
TYPE										
均衡タイプ	178 63.3% 1.5	250 58.3% -8	174 58.2% -6	106 78.5% 3.4	137 63.4% -1.4	89 61.0% -1.8	535 62.1% 3.2	88 49.2% -3.2	309 68.5% 3.1	43 51.2% -3.1
シンボリック タイプ	16 5.7% .6	19 4.4% -8	16 5.4% .3	4 3.0% -2	4 1.9% -1.5	8 5.5% 1.8	40 4.6% -1.2	12 6.7% 1.2	15 3.3% -1.2	5 6.0% 1.2
個人志向タ イプ	43 15.3% -1.5	81 18.9% .5	60 20.1% 1.0	10 7.4% -2.3	34 15.7% 1.5	21 14.4% .6	152 17.6% -3	33 18.4% .3	57 12.6% -1.0	14 16.7% 1.0
疎遠タイプ	44 15.7% -7	79 18.4% 1.0	49 16.4% -4	15 11.1% -2.1	41 19.0% 1.1	28 19.2% .9	135 15.7% -3.2	46 25.7% 3.2	70 15.5% -2.4	22 26.2% 2.4
COLUMN TOTAL	281 27.8%	429 42.5%	299 29.6%	135 27.2%	216 43.5%	146 29.4%	862 82.8%	179 17.2%	451 84.3%	84 15.7%
sig 危険率 (カイ自乗値 検定)		0.6314 N.S		0.0146 P < 0.05			0.0029 P < 0.01		0.0178 P < 0.05	
missing cases		92		92			22		22	

カイ自乗検定において統計的有意もしくは傾向を示すものを見ていくと、60代では教育程度・生活満足度・孫の年齢が挙げられる。70代では通常の最小期待度数の条件では有意なものはないが、緩い条件のもとではコミュニティ活動(町内会活動)と生活満足度がタイプの分別に影響を持っていることが分かる⁶⁾。まずは関連が認められるものに関して、タイプと各変数の規定関係を概観しておこう。

均衡タイプは、60代では教育程度が高い者は成り難く、生活満足度は満足はしていない者(どちらともつかない者と不満足な者)が成り難い。また、孫の年齢に関してはその高低はほとんど差異をもたらさない。70代ではコミュニティ活動への関与の割合が高い者がこのタイプに成り易く、非加入者は成り難い傾向がある。生活満足者は60代と同様である。

シンボリックタイプに対しては、60代では、教

育程度はその高低はあまり差異をもたらさず、生活満足度は満足している者がやや成り難く、非満足者はやや成り易い傾向がある。孫の年齢に関しては、孫が大きいものはこのタイプに成り易く、小さいものは成り難い。70代では、コミュニティ活動では関与の割合が小さいものがこのタイプに成り易い傾向が見られる。生活満足度では、非満足者が成り易いという傾向がやや見られる。

個人志向タイプは、60代では、教育程度の高い者が成り易い。生活満足度はその高低はほとんど差異をもたらさず、孫の年齢は、その年齢が低い者がこのタイプに成り易い。70代では、コミュニティ活動の関与の割合が高い者はこのタイプに成り難く、生活満足度では差異はあまり見受けられない。

疎遠タイプは、60代では、教育程度が低い者が成り難い傾向を示す。生活満足度は、満足はしていない者がこのタイプに成り易く、孫の年齢の高

＜表6C＞祖母の意味類型と各変数とのWクロス（祖母の年齢をコントロール）

実数 列% 調整標準残差	60代 雇用上の地位		70代 雇用上の地位		60代 配偶者		70代 配偶者	
	働いて いる	働いて いない	働いて いる	働いて いない	い る	現在 はい ない	い る	現在 はい ない
TYPE								
均衡タイプ	240 57.1% -1.3	376 61.1% 1.3	94 67.6% .5	255 65.2% -0.5	437 61.2% 1.5	189 56.4% -1.5	180 64.3% -1.0	176 68.5% 1.0
シンボリックタイプ	25 6.0% 1.0	28 4.6% -1.0	2 1.4% -1.7	18 4.6% 1.7	35 4.9% -0.5	19 5.7% .5	14 5.0% 1.6	6 2.3% -1.6
個人志向タイプ	81 19.3% 1.0	103 16.7% -1.0	17 12.2% -0.5	54 13.8% .5	122 17.1% -1.0	66 19.7% 1.0	38 13.6% .7	30 11.7% -0.7
疎遠タイプ	74 17.6% .0	108 17.6% .0	26 18.7% .6	64 16.4% -0.6	120 16.8% -0.6	61 18.2% .6	48 17.1% -0.1	45 17.5% .1
COLUMN TOTAL	420 40.6%	615 59.4%	139 26.2%	391 73.8%	714 68.1%	335 31.9%	280 52.1%	257 47.9%
sig 危険率 (カイ自乗値検定)	0.4702 N.S		0.3431 N.S		0.5188 N.S		0.3471 N.S	
missing cases	33		33		12		12	

＜表6D＞祖母の意味類型と各変数とのWクロス（祖母の年齢をコントロール）

実数 列% 調整標準残差	60代 健康			70代 健康			60代 孫の年齢		70代 孫の年齢	
	非常に 健康	まあ 健康	非 健康	非常に 健康	まあ 健康	非 健康	小さい	大きい	小さい	大きい
TYPE										
均衡タイプ	152 58.7% -0.3	388 59.3% -0.2	59 63.4% .8	64 75.3% 2.0	226 64.8% -0.7	41 59.4% -1.2	325 59.1% -0.3	303 60.0% .3	47 68.1% .4	312 65.8% -0.4
シンボリック タイプ	11 4.2% -0.9	40 6.1% 1.4	3 3.2% -1.0	2 2.4% -0.7	13 3.7% .3	3 4.3% .4	19 3.5% -2.6	35 6.9% 2.6	0 .0% -1.7	20 4.2% 1.7
個人志向 タイプ	52 20.1% 1.1	110 16.8% -1.2	18 19.4% .4	11 12.9% -0.2	46 13.2% -0.3	11 15.9% .6	111 20.2% 2.0	78 15.4% -2.0	8 11.6% -0.4	63 13.3% .4
疎遠タイプ	44 17.0% -0.1	116 17.7% .6	13 14.0% -0.9	8 9.4% -2.1	64 18.3% 1.1	14 20.3% .8	95 17.3% -0.2	89 17.6% .2	14 20.3% .7	79 16.7% -0.7
COLUMN TOTAL	259 25.7%	654 65.0%	93 9.2%	85 16.9%	349 69.4%	69 13.7%	550 52.1%	505 47.9%	69 12.7%	474 87.3%
sig 危険率 (カイ自乗値 検定)	0.6418 N.S			0.4063 N.S			0.0226 P < 0.05		0.3139 N.S	
missing cases	89			89			0		0	

低は、ほとんど差異をもたらさない。70代では、コミュニティ活動の関与の度合いが高い者がこのタイプに成り難く、生活満足度は60代と同様な結果である。

従って、例えば教育程度の持つ影響を検討したとき、教育程度のタイプの分別における影響は祖母の年齢によって異なってくることが理解される。同じ教育程度の高い者を選んでも、60代では個人志向タイプに成り易いという傾向があるが、70代ではこの傾向は見られないという具合である。コミュニティ活動にしても、70代では関与の度合いが高い場合には均衡タイプに成り易いが、これも60代ではそれ程でもない。

以上のように、祖母の年齢が幾つかの変数に関してはその効果を持つ姿が浮かび上がってくる。ロバートソンが報告するような明確な姿ではないにしろ、他の変数との関連においての検討の必要が示唆されていると考えて良いであろう。

しかし、祖母の年齢でコントロールした際に得られる知見でより重要なものは、先の「4-3」で得られた知見に制限が付けられるということであろう。つまり、単純クロスの結果では、シンボリックタイプと個人志向タイプに対して逆向きの方向で規定する要素はロバートソンにおいては家族外の活動であったのに対し、本データでは孫の年齢という家族的領域の要素であった。しかし、祖母の年齢でコントロールすると、孫の年齢は60代ではこの両タイプに対して逆方向の規定関係を持つことが窺われるが、70代ではこの規定関係の示唆は失われる。70代では、シンボリックタイプには孫の年齢の高低が影響を及ぼす傾向を示すが、個人志向タイプの分別には孫の年齢の高低はほとんど差異を示していない。

ここで、非常に興味深いのは、70代においてこの両タイプに対する規定的関係を窺わせるのは、調整標準残差から見ると、コミュニティ活動であるということである。つまり、この両タイプを生み出す要素としては、60代では孫の年齢という家族的領域の要素の影響が大きく、70代ではコミュニティ活動という家族外の領域の要素であるという可能性が得られるということである。ただし、こ

こで注意する必要があるのは、70代におけるコミュニティ活動はこれらのタイプに逆方向の規定関係を持っているわけではないという点である。関与の度合いが小さいものはシンボリックタイプにやや成り易い傾向を示し、関与の度合いが高い者が個人志向タイプに成り難いので、60代と70代では同じパターンではないにしろ、70代のコミュニティ活動は両タイプに対して対抗的に働き掛けているわけではない。しかし、シンボリックタイプと個人志向タイプに関しては、祖母の年齢によっては孫の年齢が大きな影響を持つが、しかしまた祖母の年齢によってはコミュニティ活動が影響してくるという結果は、今後検討するに値する収穫であろう。

この、60代では孫の年齢が70代ではコミュニティ活動が大きな影響を持つという傾向は、そのまま他のタイプにも適用されるわけではない。例えば、均衡タイプでは60代でも70代でも生活に満足はしていない者はこのタイプに成り難いというように、教育程度の影響の存在が窺われる。教育程度の持つ影響は先にも述べたように慎重な検討を要する課題であり、稿を改めて考察しなければならないであろう。また、健康に関しても、調整標準残差の情報では、非常に健康な者に60代と70代でタイプの分別で相違があることが示唆されている。

しかし、こうしたことを考慮しても、少なくとも次のことは言えるであろう。つまり、タイプ全体に及んでタイプの規定要因を検討する際には、ロバートソンのように祖母に関する要素のみを取り上げるだけでは不十分な恐れがあり、他の関与者の要素も同時に取り上げ、それらが交互作用しつつ影響を与えるのか、単独に影響を与えるのか、もしくは一人の要素のみが（例えば、祖母の要素のみが）影響しているのかについて検討する必要があるということである。従って、年齢一つ取り上げても、ロバートソンのように祖母の年齢だけを考慮するのではなく、またチャーリン&ファーステンバーグのように孫の年齢のみを強調するのではなく、両者の年齢の組合せを考えていく必要があるであろう。

5. 結びにかえて

今日パイオニアと呼ばれる高齢者は、全体としてパイオニアであるだけでなく、そのライフコースを構成する幾つかのキャリアにおいてパイオニアとしての経験をしつつある。むしろ、「全体としてパイオニア」というのは、まさにそうしたキャリアそれぞれにおいて、またそうしたキャリア間の連関においてパイオニアたることの表象と捉えるべきであろう。それ故、高齢者の生活を検討する際に、高齢化社会を招聘した人口学的変数の影響を個別のキャリアにおいて読み取るという方向を設定するというのは、一つの妥当な方法であると言える。そしてその出発点は、もちろん各キャリアの現状を捉え、基礎的な資料を提供することに在る。

本稿はこうした視点の下、祖父母であるという経験を材料とした。一つには、祖父母という地位が高齢者に多く経験される地位であるということ、もう一つには、祖父母であることがまさに人口学的変数によって現在非常に大きな変化を迎えている可能性が高いということが明白であることにより、上記の視点の下では祖上にのほすに相応しいものと思われたからである。

具体的な作業としては、アメリカにおける祖母の意味類型に関する報告を比較の材料として検討を進めてきた。分析は依然として不十分の誇りを免れないが、ここで、先行研究の検討から作業課題として設定したものに対してのまとめを行うならば以下の様になる。まず、第一の課題については、各タイプの単純集計では予想通り均衡タイプが最も多く出現した。しかし疎遠タイプが2番目に多かったのは、伝統的な祖母に関するイメージからすると今後の検討を要する発見であった。各タイプの規定要因はアメリカにおける報告とは必ずしも一致した傾向を見せず、アメリカにおける知見をそのまま日本に適用することには留保が必要な可能性が生じた。第二の課題では、アメリカではシンボリックタイプと個人志向タイプという対照的なタイプを生み出すのは家族外の活動の様

態であり、従って祖母の意味類型は対照的なライフスタイルの一つの指標となる可能性があったが、本データでは孫の年齢という家族的な領域の要素の影響が強かった。従って先の留保には一層の拍車がかかることとなった。第三の課題では、しかし、この第二の課題で得られた知見に制限が加えられた点が注意を引いた。つまり、孫の年齢は祖母が60代では先の対照的なタイプにやはり対称的に規定する関係が見られたが、70代ではこの関係が失われ、家族外のコミュニティ活動が影響を持つ可能性が示唆されたということである（もっとも、幾つかの条件付きではあるが）。

高齢者（女性）の生活の一つの社会的領域としての祖母性的一端を検討してきたが、以上の検討から、今後の祖母性の検討には祖母の社会的属性と年齢を見るだけでは不十分であり、孫という関与者の情報も取り込み、それらの相互作用を検討する必要があることが示された。従って祖母の意味類型は単純な形では高齢女性のライフスタイルの指標として用いることは出来ないものの、こうした複雑な生活の諸層の反映であるがゆえに、今後の議論の展開の価値は十分にあると思われる。

ここで、作業の今後の展開の一つの準備として、祖母性に対する人口学的変数の影響がどのように現れるかについて若干の検討を行っておく。

結論から述べれば、冒頭の箇所で示したライフコース論の基本的な視点の持つメカニズムを通じて人口学的変数の影響が現れることとなる。すなわち、二番目に挙げた「個人のライフコースは他者のライフコースとの係わりあいのなかで展開される（＝共同製作）」というメカニズムを通じてである。平均余命の伸長という人口学的変数の変動は、祖母が孫と生物学的に生存して接する期間の延長をもたらす、祖母であることに對する孫の影響力が増大する可能性をもたらしたのである。無論、ここで言う影響力の増大とは、接触の度合の減少も含むものである。孫が小さな時は個人志向タイプに成り易く大きいとシンボリックタイプに成り易いという例はその典型である。しかしまた、祖母が60代と70代で孫の年齢の影響に相違が見られたということは、祖母の平均余命の伸長が祖

母の中にのみで作用する影響（例えば、身体的能力など）との相互作用の存在が示唆され、まさしく共同製作の中でその影響が表出することとなる。

祖母と孫の年齢の重要性がここまで示されてきたが、しかし、その年齢の持つ意味は現段階では不明である。この年齢の持つ意味を検討する際には、3番目に示したライフコース視点が有効である。そこでは個人的時間・社会的時間・歴史的時間という時間の重層構造が述べられているが、例えば、ロバートソンが年齢を重視した文脈はこの重層構造のなかで良く理解できるだろう。ロバートソンが教育程度が年齢の機能であると言うのは、これは歴史的時間の次元で理解される（＝コーホート効果）。就業状況がタイプの分別に影響を及ぼすというとき、これは社会的時間の次元上の位置の問題となる。若くて活動量が大きいというとき、これは部分的には個人的時間の次元の問題となる（＝身体的能力）、という具合である。従って、本データの60代・70代という年齢や孫の年齢の持つ意味をこれら三つの時間の次元で検討していくことが大きな課題の一つとなる。

最後に、今後の課題を列挙するならば、本データでタイプの分別に影響があった変数間の交互作用を明らかにすることがまず挙げられる。また、本稿ではロバートソンとの対照という作業を行なったためにシンボリックタイプと個人志向タイプの分別に偏ったが、頻度からするならば、同じく対称的な均衡タイプと疎遠タイプの分別の検討は重要性を持つと思われる。特に伝統的なイメージとは反する疎遠タイプの頻度が多いことは、高齢女性のライフスタイルを考える上で是非とも検討を要する課題である。この他にも前述の年齢の意味の解釈、祖父と祖母の相違の検討、両親世代の情報との組み合わせ（安藤、1990）、他のキャリアとの相互作用のより細かな分析、など多くのものが考えられるが、これまでの議論から、その際にはライフコース視点が有効となるであろうことを付記して結びの代わりとする。

注

- (1) この回収率は郵送法としては非常に高い。大澤・安立は郵送法による原宿の調査における48.1%という回収率、および自由回答欄への高い記入率（37%）に関して、その高い数字に対する社会学的理解が必要であることを促したが（大澤・安立、1990）、今回の調査の回収率の数字は遥かにそれを上回るものであり、留意する必要があることが示されている。（なお、自由回答の形式の回答欄への記入率もやはり高く、「大切にしている団体やグループ」（44.0%）「日々の暮らしにおける楽しみ」（79.6%）であった。
- (2) ロバートソンの調査では、祖母が母親の役割を遂行しないという条件を目的に別居の孫がいるものが選ばれた。しかし、同居の場合にも一般的に「非干渉のルール」（Cunningham - Burley, S: 1985）が作用すること、孫が近接して居住している場合には祖父母が両親の機能の一部を果たすこともあること、そしてロバートソンのそもそもの前提（意味は行為に先行する）に鑑み、本稿では初めから別居の孫だけに限定せず、むしろ後にその相違を検討することが可能となる形にしておくことがより有益であると思われたので、ここでは同居・別居の区別をしなかった。
- (3) 社会的次元のうちの「孫がいるおかげで社会に対する責任を果たしたように思える」は、ロバートソンの議論に適合的と思われるものを筆者のうちの一名のヒアリング（安藤、1989: 122）で得られたものを用いたものである。
- (4) <表1>における均衡タイプと疎遠タイプがほぼ同じ大きさであることに留意されたい。
- (5) ここで「暫定的に」としたのは、ロバートソンの分析（分散分析）では年齢や教育程度などが従属変数、タイプが独立変数となってしまう、その解釈に注意を要するからである。
- (6) <表6>においてカイ自乗検定の結果を括弧で括弧してあるのは、最小の期待度数に関する条件が緩い場合に使用可能であるということの意味する。通常カイ自乗検定においては、最小の期待度数は5以上であることが必要条件とされるが、本稿では

厳密な仮説を検定するのではないこと（タイプに関する情報の記述の際に選択の一つの基準として用い、その場合には残差を援用して記述してある）、また祖親性に関する研究が少ない中であっては独立変数のカテゴリーによる相違の情報をより多く残すことも必要と思われることにより、最小の期待度数に関しては緩い条件（1以上）を提唱する説（Snedecor, G.W and Cochran, W.G., 1967、Statistical Methods, Iowa State Univ.Press、なお、この説の情報の典拠は、原、1983：219）に依拠することもそれ程不都合ではないと考える。（もっとも、本文で最初に取り上げると述べたものは慣例の5以上のものに限ったが。）

文 献 一 覧

- 安藤 究
1989, 「祖親性研究序論～社会変動と祖親性研究」『上智大学 社会学論集』14, pp.105～130
1990, 「祖親性における共同製作の次元～ライフコース視点からの接近」『上智大学 社会学論集』15
- Bengtson, V.L.,
1985, " Diversity and Symbolism in Grandparental roles, "in Bengtson, V.L., Robertson, J.F.(eds.), *Grandparentood*. (Beverly Hills ; Sage) pp.11 - 25
- Cherlin, A., Furstenberg, F.Jr.,
1986, *The New American Grandparent*. (New York ; Basic Books)
- Cunningham - Burley, S.,
1984, "We don't Talk About It., : Issues of Gender and Method in Portrayal of Grnadfathers " *Sociology*, 18, pp.325 - 338
- Elder, G.H., Jr.,
1975, "Age Differentiation and the Life Course, " *Annual Review of Sociology*, 1, pp.165 - 190
1977, "Family History and the Life Course, " *Journal of Family History*, 2, pp.279 - 304
- 藤本信子
1976, 「祖父母・孫の関係」上子武次・増田光吉編『三世代家族』所収, 垣内出版, pp.175 - 195
- Hagestat, G.O.,
1985, "Continuity and Connectedness, " in Bengtson, V.L., Robertson, J .F, 1985, pp. 31 - 48
- Kahana, B., Kahana, E.,
1970, "Grandparenthood from the Perspective of the Developing Grandchildren, " *Developemental Psychology*, vol.3, pp.98 - 105
- 原 純輔
1983, 「質的データの解析法」青井和男監修・直井優編集『社会調査の基礎』サイエンス社所収, pp.205 - 277
- Kivnich, H.Q.,
1981, "An Overview of Meaning and Mental Health, " *The Gerontologist*, 1982, 22 (1), pp.59 - 66
- 正岡寛司
1982, 「ライフコース分析の農村家族への応用とその意味」『家族研究年報』8, pp.12 - 16
- Neugarten, B.L., Weinstein, K.L.,
1964, "The Changing American Grandparent, " *Journal of Marriage and the Family*, 26, pp.199 - 204
- 直井道子
1990, 「都市居住高齢者の幸福感」『総合都市研究』39, pp.149 - 159
- ブラス, D (井上俊訳)
1985, 『日本人の生き方』岩波書店
- Robertson, J.F.,
1977, "Grandparenthood : A Study of Role Conceptions, " *Journal of Marriage and the Family the Family*, 39, pp.165 - 174
- 園部雅久
1989, 「東京の集団世界」『上智大学 社会学論集』14, pp.40 - 70

Key Words (キー・ワード)

祖母性 (Grandmotherhood)、均衡タイプ (Apportioned Type)、シンボリックタイプ (Symbolic Type)、個人志向タイプ (Individualized Type)、疎遠タイプ (Remote Type)

GRANDMOTHERHOOD OF THE URBAN ELDERLY

Kiwamu Andoh* and Yuetsu Takahashi**

*Postgraduate Student of Sophia University

**Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.45, 1992, pp. 97~116

Abstract

This paper is aimed at presenting basic data for studying the new life – style of the urban elderly by focussing on their grandmotherhood, under the influence of demographical variables. As for the practical procedure, we compared the typology of grandmotherhood meaning in Japan and that in America. We then found that remote type, which was diametrically opposite to the typical image of grandmother, occurred with the second highest frequency. With regard to type definition., the American variables differed from the Japanese – including the direction of defining – especially in the stage where the *Symbolic type* is contracted with the *individual type* on a two – dimensional table. Compared to the American data on activities outside family appeared not significant in Japan. Instead, the age of the grandchildren was influential, considered an element of the family domain. But when the age of the grandmother is controlled, the children's age had an influence in the asymmetrical direction only in their 60s, losing it in their 70s. Accordingly, the typology of the meaning of grandmotherhood is formed through the interplay of, at the very least, the grandmother's age, her other attributes, and the grandchildren's ages ; and then it cannot easily be used as an indicator of the elderly female's life – style. Nevertheless, further discussion of the matter would surely be of value.